
Endless Game

聖華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Endless Game

【Nコード】

N2667Y

【作者名】

聖華

【あらすじ】

悪魔と契約して始めた馬鹿げたゲームを終わらす物語。

主人公はなぜかその物語で奇められていた女子生徒と入れ替わりでこの物語に来てしまった普通の女子高校生。

面倒くさがりやの主人公が神様のお願いを聞き入れつつ(?)、元の世界に帰還するために孤軍奮闘したり、共闘したりする。勿論、邪魔者はたくさんいたりいなかったり。

設定

舞台

日端によって2010年が永遠ループの中、日端がいる学園が舞台。学園の名は【海華学園】。お坊っちゃんお嬢様が集っている私立学園。

メインキャラクター

おじはらしいか
織原詩歌

高校2年 157cm 46kg 今作の主人公

一応可愛いと思える容姿。髪の毛絶賛伸ばし中の女子高生。

逆ハーされる女や自分に自惚れている男が嫌い。いたら徹底的に無視。

裕福な家庭で育っているが、我儘少女には育ちませんでしたよかったです。

趣味は読書、好きなことは睡眠とゲーム。

「平穩に過ごさせてほしいものだよ、まったくもって」

ひばたみの
日端美乃

高校2年 153cm 39kg 逆ハー女

無駄に可愛い。周りの人みんな見惚れるぐらい可愛い。

性格がとてつもなく悪い。いわゆる悪女。

趣味は男を騙すこと、好きなことは男に愛でられること。

「私が幸せになるには多少の犠牲も必要なのよ」

攻略キャラクター

この学園では生徒会・風紀委員会にイケメンが集っており、攻略対象はこの2つに属している男達。

生徒会

くがなおと

久我直人 高校3年

生徒会長。金髪赤眼のクールビューティー。

紀田裕太 きたゆつた 高校3年

生徒副会長。明るい茶髪に黒目。やんちゃでお節介焼きですが、そこもいいところ。

馬場空也 まばあ 高校2年

生徒会書記。黒髪紫眼。ツンツンデレツンデレツンツン、なんてお歌がお似合いな男の子。

橘薫 たちばなかおる 高校2年

生徒会会計。黒髪に赤のメッシュ入り、茶眼。男の娘なんて言ったらメッ！

風紀委員会

辰巳裕樹 たつみゆうき 高校3年

風紀委員長。黒曜石のような髪と目。冷静沈着だが、久我とよく喧嘩しています。

辰巳功太 たつみこうた 高校3年

風紀副委員長。紫髪に隻眼。稀に見る熱血君、近づいたらもれなく暑さが貰えます。

雲雀涼夜 ひばりりょうや 高校2年

風紀委員。茶髪の碧眼。物腰が柔らかいが、腹黒です。

清水雅人 しみずまこと 高校1年

風紀委員。赤髪紅眼。人懐っこく、お茶目。常識人じゃない人が嫌いな子。

隠しキャラ

どのゲームでもありがち設定。いわゆる隠しキャラ。ある条件を満たさないと出てきません。

奥村駿おくむらしゅん

詳細不明。主人公と面識あり……？

サブキャラクター

柴田菜菜しばたなな 高校2年

主人公が自分の世界に行く代わりに、主人公の世界に飛ばされた女の子。

日端に苛められており、超次元パワーで難を逃れた。

(追記：名前の菜菜は本当は菜々です)

紀田明音きたあきね 高校2年

主人公の友人。主人公が入れ替わったことに気づいている一人。

ダブルブローグ

私がどれだけの苦勞を費やしてあの高校にいったのだろう。

留年を逃れるためにどれだけ大嫌いな勉強を毎日したんだろう。

数え切れない苦勞を犯してまで、私は今日まで頑張ってきた。それなのに。

どうして私は認められないの？ 認められて可愛がられて、愛されていきたいだけののに。

ああ、そうかそうよね。私が悪いんじゃない。周りが悪いのよ。私を認めない周りが悪いのよ。そうよ、そうなのよ！

なら、私を認めさせてあげるわ。私の周りが壊れたってどうも思わないし。

私を馬鹿にして、嘲笑って、踏みにじった奴らなんて知らないわ。

「私が幸せになるには多少の犠牲なんて付きものだもの」

頂点にたつ、この私が。

だって私が幸せじゃなきゃ、この世界は狂っているもの。

ね、貴方もそう思うでしょ？

うふふっ、私のお願い事はゼーんぶ叶えてくれる。
貴方が叶えてくれる、全部……ね？

「ん……え、はっ？」

朝起きたらそこは屋上だった。無駄に肌寒い風を浴びながら、体を起こすと見慣れない制服に身を包んである。ただ、見慣れたスクールバックが手元にあったのは少し心の支えになったかもしれない。ただ、中身は見慣れないもので、一瞬で閉じました。

なんで自分こんな状態になってんの？ どういうことなの？
こんなの絶対おかしいよ！！

って、落ち着け、落ち着け自分。きっとこれはほら、アレだよ。
俗に言う夢だよ。

起きたら「夢オチかよ」って思えるよ自分。思い切って頬を掴んで

「っ、痛っ！」

できなかつた。夢オチとかそんなの全然できなかつた。

涙で滲む視界に変わらず映るのは、どんよりとした灰色の空と見

知らぬ街並みだけ。

自分が知っている世界は、一向にやってこない。

「マジ、どういうことなの……」

重い溜息が口から漏れ、考えることすら面倒くさくなる。

なんて今の状態を飲み込むのに諦めかけていると、また肌寒い風が吹く。さっき吹いた時よりも体が冷え込み、ぶるぶるっと体を震わせる。と同時に、スクバの中から振動が腰から伝わってきた。

「……もしかして」

勢い良くスクバを開け、中を探るとやっぱりあった文明の機器、携帯電話。

着信画面を見ると、知らぬ電話番号。ということは、通話ですか。

7

「……もしもし」

『ああ、やっと繋がった。よかったです、貴方が来て下さって』

「……某アニメにある宗教団体の人？ 勧誘ならお断りしときますけど……」

『違いますよ、私は 神様です』

「……すみません、聞こえなかったです。何で、言いました？」

『仕様のない方ですね……もう一度言います。私は

神様です』

あまりに淡々と紡がれるその言葉に、呆然とし言葉を失う自分。
今起きてから数分程しか経っていなくて、分からないことだらけ
だったけどこれだけは言える。

この電話の主に混乱させられているってことは、確かに言える。

（見知らぬ世界には神様なんているんですね）

（なんて感想しか残せないけど、私間違っじゃないよね？）

少しの会話

これまでのあらすじ。

起きたら私は見知らぬ場所において、帰りたいつて心の底から願っていたら電波障害起こした人が「私は神様です」って……

『ちよ、待つてください。あらすじが確実に貴方の手によって改ざんされていますから、それ以上口に出さないで！ 貴方怖い！』

「え、なに聞こえない。というか聞きたくない。ってか、神様なんなら今すぐ私を元の世界に帰還させる」

『聞こえていますよね。その反応聞く限り聞こえていますよね、私の声』

本当は心細くなった自分にとって、今の会話はかなり心の支えになっている。

元いた世界の友人と同じような接し方もとても支えになる。彼女（声質が女っぽいので）の会話は、本心から言ってみれば続けたいたいものだ。

「切るよ、切るよ？ 電波女さん切りますよ？」

『いや、切らないで！ 切らないでください！』

うわああ、と縋る彼女が面白くて小さく笑う。

だけど、それが案外不服だったみたいで、次の瞬間、怒気を含んだ声が

『あー、もうっ！ これ以上無駄話をしている暇ではないのです！ 貴方には、この世界を救ってもらう必要があるのですから！』

おかしい言葉と共に、耳に響いてきた。やっぱり切った方がいいかな？

* * * * *

あれから言い争いになって数十分。激しい口論の末、ようやく自分がどうしてこうなっているのか、理由^{ワケ}を聞かせてもらった。

それは中学3年生が素直に飲み込められるものではなく、いくら2次元が好きだからっというて素直に理解できるものには到底及ばなかった。

しばらく間を空けて、混乱する頭を無理に働かせながら、ようやく言葉を零し出す。

「……で、簡単に言うなれば、私は2010年を永遠ループしているこの世界にトリップしてきたと」

『はい』

「で、その子がまたこの世界に戻ってこられるように、発端者の日端美乃を潰せと」

『はい』

「それで？ そいつを潰すまで私は元の世界に帰れないと」

『そういうことになりますね』

電話の向こうで確実に笑みを零しているだろう神様が想像できずしてしまう。

握っている携帯が妙な音をたてているが、気にせず会話を交わし続ける。

「随分と、面倒くさいね」

『私達もなるべく力を尽くしてみたのですが……予想以上に彼女の力が強くて強くて』

「段々話の内容がファンタジー化していつてるのは全然気のせいじゃないんだよね、これがまた」

八八、と肩を竦めるが、向こうからは「ミリたりとも笑いは聞こえない。」

「こんな冗談言ってる場合じゃないってか」

『本当に申し訳ないです。ですが、これ以上彼女を好き勝手させるわけにはいきません故。』

今日はもう貴方の家に帰ってください。家の場所は貴方から見たら、綺麗に輝いていると思いますわ』

「え、ちよっ！……切れた」

有無を言わず切れた通話に、「少しは待てよ」と思う。けど、彼女にとっては急がなければならぬ事態が巻き起こっているのだからしょうがない。

溜息がつきたくなるのを我慢し、屋上を後にする。さて、ここを出発地点にするなら次の行き先は『家』か。なんか……嫌な予感があるねえ。

(でも、まあ面白そうだしっか)

(神様に頼まれごととかファンタジー切ったの依頼だからね、頑張らなくちゃ)

1年半振りの再開

屋上があるなら、ここは学校か会社かっつてのは分かることだ。因みに自分がいるのは前者の方だけだ。

階段を降りて多分正面玄関っつていう玄関から出ようとした瞬間、呼び止められるのは想定するべきだったよね、うん。

「おい、お前ちょっと待て」

背後からイケボで呼び止められ、ドアにかけようとした手を止める。ぎこちない動作で振り返ると、後ろには眼鏡をかけたイケメンの先生が。

両腕を組んで、私をじろじろと観察する先生にごくりと唾を飲み込んだ。

だって、もしかしたら私っつて忍び込んだとかそういうのだったらこの場合とてつもなくヤバイと思うし。

もしそれで上手く難を逃れても、次はどう対処すべきかわからないし。

非常に危ない場面に冷や汗を2、3粒流れるのを感じると、先生がぼつりと呟いた。

「……あ、お前明日転校してくる織原か」

「え？」

転校、という言葉聞いて一瞬戸惑った。てっきりこの在校生だと思っっていたからだ。

動揺する私に先生（？）が心配そうな視線を向けてくる。体調が悪いとでも見られているんだろうか。

パニくる私は一度呼吸を整えると、小さく頷き肯定した。

「はい。転校してくる織原です」

「なるほどな、その様子じゃ学校の下調べってやつだな。でもするんなら先に先生に言ってくれないと」

「すいません……」

「分かればいいんだよ、分かれば。まあ、今日はもう遅いし気をつけるよ」

そう言っただアを開けてくれる先生。私は軽く挨拶をすると、これ以上何かを言われる前に鞆の紐を強く握りしめると、走ってそこから逃げ帰った。

「相変わらず人の言葉に疑い持たねー奴だな、お前は」

だからこそ私は、遠くなっていく私を見つめる先生が呟く声を知らなかった。

* * * * *

「自分の家が輝いて見えるって言ってたけど……なくね？」

すっかり暗くなった道を歩きながら、周りを見渡すが一向に家は見つからない。

後ろを振り返ってみると、学校はかなり遠くにある。

「結構、遠くまで来たな……」

元々知らない道を携帯の地図で進んできた。が、さっきで携帯のバッテリーが切れ、強制終了。

それから知らない道をあっちいたりこっちいたり……勿論、おかげで迷ってます。迷子です。

ふと腕時計を見れば、時刻は7時43分。おっと、健全な小学生以下の子供は寝ている時間じゃマイカ。そして、危ないおじさん達が始動する時間ですね。

「これ以上迷ってたら体力的にもヤバイな……あー、もうっホントどこにあんだよっ」

ぶつくさ愚痴りながら、曲がり角を曲がると右の頭上がなにやら光ってます、光ってます。

もしや、と思い顔を見上げると、そこには暗闇に包まれる時間帯には不釣り合いな家がぼつんとあった。

「あ、はは……やっと、見つけた」

疲労困憊で倒れそうな私をよそにららんと輝く家。確かに、輝いている。

こんな自然発光してるけど、ほかの人には見えないとかそういう設定になってるんだらうな、とか思いつつ、家の門を開けてみる。

「うわ、豪華」

入った瞬間零れたのがこれってどうかしてるぜ！ っと思っけど、これは凄いよ。

玄関まで白いタイルが敷き詰められているのはまだ許す。周りに

花が植えてあるのも許す。

ただ、さ。その植えてある花が青い薔薇っていつのはどういふこと？

「確か2009年の11月辺りに普通の薔薇の約10倍の値段で売られたんだよね、青薔薇って。」

……って、誰に同意を求めてるんだか」

誰も傍にいないことを忘れていて、ついつい後ろを振り返ってしまっ。

だけど、後ろは誰もおらず返事もなく。寂しくなって、つい自分を嘲笑い。

もしここで友人がいたらなあ、なんて思うけれどそれはない、と断ち切って家の中に私は足を進めた。

* * * * *

家の中を十分に探索した後、私は今2階にあった3部屋の内、右の奥にあった部屋の中にいる。

充電器をぶっこんである携帯で、今度は眠たくなるまで暇潰しにテトリスで遊び呆けている状態。

まあ、でも実際はあの神様からいつ連絡くるか分からないからずっと携帯の側にいるだけなんだけども。

「っく、あー、危なっ！ うわわっ、ちょ、クソッ、あと少しだったのに……レベル9は辛い、上まで貯まるのかなり早いし」

レベルが上がっていくにつれて上から降ってくるピースも早いと、中々目が追いつかない。

けどそれがまた楽しい。けど、難しいからちよつとやる気なくす。

また最初からか、と嘆いていると手に振動が。画面を見ると、電話番号。

「あー、もしもし」

『こんばんは、私は貴方の愛する神様です』

「切ってもいいですか？」

『御免なさい、ふざけすぎました』

一瞬声分からなかったから本気で切るうと思ったよ奥さん。

『その様子じゃ家に着いたみたいですね』

「途中で迷子になりかけたけどな」

『貴方ならありえそうですね』

「馬鹿にしてんのか」

さらっ言われた言葉が癪に障る。が、電話の主は先ほどのような慌てっぷりはなく。

『怒らないでくださいまし。ところで、協力者には会えましたか？』

「協力者……？」

『そう、協力者。まだ会えていない、ということはもうそろそろですか』

話がまったく見えないことに、小首を傾げる。だけど、声だけで会話している私たちにとってその動作は伝わるわけもなく。返答が返ってこないまま、何分か経ちそうになった時。

急に視界が何かによって真っ暗になった。覆いかぶさる何かは少し熱を持っていて、それが人の手であることは認識できた。

「うわっ、急に目の前が真っ暗になった」

『変質者にでも襲われているのですか？』

「さらっと危ないことを言うね」

『でも私の勘って結構当たるのですよ。きっと変態でロリコンでプレイボーイでマニアッ……』

「ちげーっつーの、全然テメーの勘なんて当たってねえよ。織原なんとかコイツに言ってくれ」

神様の行き過ぎた発言をどこかで聞いたことがある声が遮る。少しテノール気味で、落ち着いたその声。なんか聞いたことあるじゃないな、聞き慣れてるわこの声。どこだったけ？ 私はどこで聞いた？

……確か、一年半前……の、学校……確か、失踪……いや、行方不明？ ……あ、 možy。

「もしか、しなくても……奥村？」

「おー、当たり前」

目の前が明るくなりと同時に振り返るとそこには、先ほど玄関で会った先生がよっ、と片手を上げてそこにいた。

その先生が和やかに笑う顔は一年半前にいなくなった奥村そっくりで。

確かに言われてみれば、顔は大人びているけど雰囲気は同じで。

久々に会って嬉しいのはあるけれど、さすがに驚きの方が先に来るのが当たり前で。

私は、思いっきり叫びました。

「ええええええ！？」

「煩っ！」

『感動の再開で普通は叫ばないですか？』

(いや、普通は叫ぶよ、これ！)

(っていつか、なんでここにんの！？)

1年半振りの再開（後書き）

1年半振りに奥村君と織原さんが出会いました。良いことです。

自分自身の前置き

驚きのあまり、「これこそ夢だ」と呟いてベッドに潜り込もうとするが、奥村に慌ててそれを止められる。

「どうやら、自分で現状が上手く飲み込めてないらしい。でもしょうがないよね。」

初日なのに色々聞かされてるんだから。

正座して沈黙する私に温めたミルクティーを手渡す奥村。優しいところは変わってませんね。

なんてしみじみ思いながら、礼を入れ受け取った。

寒い外で冷えきった手に伝わる温かいミルクティー。とっても気持ちいいです。

「い、頂きます」

か細い声で断りを入れ、カップを持ち上げようとする。が、あまりの震えにカップが異常に揺れまくり、中身が一々溢れそうになる。

「もうちょっと落ち着け！ 落ち着いてから飲め、な？」

手からマグカップを奪い取られ、「あ」と呟く私。どうしよう、今なら〇と千尋の〇隠しの〇なしになれるんじゃないかな。あ、ちよっと待って。重要なところを〇で隠しすぎているせいで、全く違う意味に受け取れる。思春期真っ盛りの子ならコレ、卑猥な意味にとるんじゃない？ ヤッターエロイコワイ。

「……織原、お前何一人で百面相してた。怖いぞ」

「いいんだ怖くて。私は今から思春期の男子が興奮しすぎて自分

を抑えられないぐらいになってついには変態行動にすら出ちゃう卑猥な言葉を想像するために自分の生涯をかけてまるでそれは芭蕉さん（曾良君はいないよ！）のように各地を転々と旅に出るから」「……一息で言い切るそれも怖いな」「っていつのは嘘よ」「嘘かよ!？」

私の言葉に振り回されて、ころころと変わる表情も変わっていない。

仕草も素振りも何も、何一つ変わってない。

「ホント1年以上経っても何も変わってないな、奥村」

「なっ、一応大人びてるだろーが!」

「いや、全然変わってない。変わってないよ、お前」

幼馴染で、同級生で、長年付き添った仲だから分かるのかもしれないけど。

もし私じゃなかったら「変わったね」って言うかもしれないけど。私にとっただら君は全く変わってなくて。

「織原……?」

「……すぐ、奥村だって分かるよ？ 分かる、から……っ」

みつともなく泣き始める私を抱き寄せて、慰める君はやっぱり変わっていない。

そうやって泣きじゃくって慰められて、通話中の神様を放置していたのに気づくのはそれから約数十分ぐらい後のこと。

* * * * *

『話をしてもいい状態になったのかしら?』

「いや、なつたはなつたが織原が泣きすぎて今度は眠りにつきそ
うだから要点まとめて言つてやつてくれ」

『ええ!?!』

悲痛な叫びが耳に響くが、睡魔と孤軍奮闘中の織原に届くことは
ない。

かくかくと揺れる頭、一生懸命に瞬きする目やらを見ているとど
うしても寝させてやりたいが……。

こつちもこつちで色々大変なんだから、今は起きてもらわねえと
な。

「ちよつと待つててくれ」

『それは構わないけど、大丈夫なの……?』

「あー、大丈夫大丈夫。ほら、起きろ織原。起きろー」

「……んー、起きてる、起きてる。だから……話進め、といて…
…」

いや、今にも眠りそうな状態なのを起きてるつては言わないんだ
ぞ。

このままじゃ睡眠モードに入りそうな幼馴染を見て、溜息をつく。

「この歳になって未だにこれされるのは弱み握られやすいんじゃ
ねーのか……?」

『え?』

「あ、いや……おい、織原。おーりーはーら。この1件終わった
ら、お前の好きなもの買えるだけ買ってやるから起きろ。覚醒しろ」

『ちよ、今時餌付けとか、しかも彼女に……』

そんな手通用するはずない、とでも言いたかったんだろう。だが、その言葉は織原の言葉で喉の奥におしとどまることになった。

「マジで？ 終わったらなんでも買ってきてくれる!？」

「あー、マジマジ。だから起きれ」

「よし、頑張って起きる」

『……………』

呆れて物も言えなくなったのか、言葉の代わりに溜息が聞こえてくる。

俺も実際この歳でまだ通用するのが、ビックリだし半ば呆れている。早く餌付けされなくても断れる精神を持って欲しいものだ、まったく。

『……………えー、ところで。明日から彼女がどういう positioning について行動しなければならぬのか説明していい状況なのかな？ これは』

電話の向こうからおずおずと尋ねられる。真正面であぐらをかいているが、顔はちゃんと話を聞きます、といった表情で。

喉から溢れ出そうになる その顔ウザイから止めてくれ 言葉を飲み込んで、これ以上会話を違う方向に持っていけないために、正しい返答をする俺。

「聞く気満々だから大丈夫だ」

『OK。あー……………と、詩歌さんだっけ？ 最初に言っとくけれど、この設定を無視し続けて勝手な行動ばかりとつたら悪い方向にも良い方向にも進むことを忘れないで』

「……………分かった」

やけに重たくなった雰囲気の中、織原は頷いた。この先に起こる惨劇なんて、知らないままに。

(本当の意味なんて分かってねえくせに)

(人の言葉を素直に飲み込むのが悪い癖だな、ホント)

自分自身の前置き（後書き）

書き忘れてたけど、神様と通話中（2人異常いる場合）はスピーカ
ーになってます。

おりはらは せつていを りかいした！

「朝になったら、起こすからな」

「……………」

話の後、すぐさまベッドに潜り込み、今に至るまで喋ることすらしていない私に声をかけてくれる奥村。

だけど、いっこうに返事しないのに諦めたのか、部屋から静かに出ていった。

小さい頃から私は、周りの子達よりも厳しく育てられてきた。

保育園の時は大人1人分の量を食べ終わるまで、寝かされなくて。礼儀作法をちゃんとしないと叩かれて、しまいには外に放り出されたこともあった。

辛かったけど、耐えた。だから、今大抵のことには対処できて、厳しくても我慢できた。

それに加えて、本が好きだったから。ファンタジーとか、そんな出来事が起きてもすんなり受け止められた。今日だってそうだった。まだ受けいられる範囲内だった。

だから、さっきの話も一応受けいられる範囲内。でも、精神的にまだまだ子供な私が耐えられるんだろうか ……

* * * * *

「貴方は、元は中学3年ですが、明日からは高校2年として過ごしてもらいます。」

知識については、私の力で貴方の頭の中に入れてあるので問題ないです。普通に通っても支障はないはず。役員には入っておらず、部活は吹奏楽部。

そして、貴方には明日から柴田菜々の代わりに苛めを受けてもらいます。もちろん、異論は認めない。

ちなみに、なぜ苛められているかというのは日端への中傷、軽い暴力。実際は日端の虚偽なのですがね。主に貴方が受ける苛めは、暴力、批判、中傷、物への悪戯など一昔前のものです。

学校に行けばわかりますが、貴方は普段女子に守られています。代わりに日端を中心とする男子生徒に毛嫌いされています。男子との接触はなるべく控えて下さい。

基本的に貴方の性格と柴田菜々の性格は一緒なので、普段通り過ごしても問題ありません。

……ここまでで質問は？」

「ないけど 長え」

「そうですか」

ボケがなく、淡々と返される言葉。あれ？ そういえば今思ったんだけど、神様の口調って所々で何か違ってない？ 私の気のせい？

『気のせいではありません。通話している神は、職務時間の休憩中に入れてくるので毎度変わるの当たり前です』

「……わ、心読まれた。つて、ええ！？ 神様つて、え、複数いるの？！」

『はい、います。貴方がたが信仰する神の数だけ、神が存在します。人間が強く想像するだけで、神は生まれます』

「なにその王道設定面白い。じゃあさ、トイレの神様とかいるの？」

一瞬の間。自分にとっては数秒経ったようにも感じられたけど、実際には一瞬。

静かな沈黙が一瞬入った後、やんわりとしたアルトの声が報告してきた。

『存在しますが、職務帰還が長いため会話することは不可能に値します』

「うっわ、凄い！ トイレの神様とかつ、へえええ、いるもんはいるんだなあ」

「感心するか笑うかどっちかにしろよ……」

頭を抱える奥村が分かるのか、神様（何人目だコレ）が『共感しかできませんね』と呟いていた。

しかも溜息混じりに。なんか、私の存在って結構扱い酷くないですか？

って思ったら、無性に拗ねなくなっただけど、神様のせいで強制終了させられることに。

『話を元の方向に戻してもよろしいですか？』

「あ、どうぞ」

『……この永遠ループしている2010年で、日端美乃は海華学園にて自分の好む異性をおとしています。攻略対象は生徒会と風紀委員に關与する人間です。それ以外の人間には愛を振りまくだけで、求める事は一切しません』

「うわあ……一方通行じゃん。それに気付かないって、恋は盲目ってやつだね」

「俺を見るな、俺を」

このイケメンで性格良さそう（実際良いんだけどな）で、人を見る目はありそうな彼でも、一回容姿良いのに性格ダメダメな女と付き合っちゃって。

周りが計画を練って、そのダメ女の悪女っぷりを見せつけるまでア

アイドルの追っかけみたいになってたからなあ。あれは、思い返すだけで可哀想としか思えないよ、ママには。

「もう、ママは貴方をそんな風に育てた覚えはないのに……！」

「誰がママ！？俺はお前の子供じゃねーぞ！？」

「つまり、私はその日端っつていう奴の荒ぶりっぷりに感心しながらそれを止めればいいと」

『簡単に解釈してもらえばそうです』

「自分でふつといて無視か、テメーは」

笑顔で対応してくる君が怖いよ、なんて言ったら捻り潰されること間違いなしだから小さく中傷の言葉で返しておく。でも、中傷も駄目だったです。

中傷に反応して、額に青筋浮かばせデコピンしてきた奥村さん。

おくむらの デコピン こうげき！

こうかは ばつぐんだ！

おりはらは たおれた！

「っ〜！ち、力加減を……もう、少し」

「してんだろーが十分」

目の前の男は何を言っているんだろうか？ 殴りたくなる衝動を抑えつつ、額をさする。

指が触れる度に痛むそこは、確実に手加減されていない、ということとを証明している。

女の体と男の体の柔らかさを考えようぜ、痛いわ。

「これで子供出来なくなったら責任とりなさいよね！」

「できなくなる訳ねーだろ！つか、それ腹！暴行とか受けすぎ

たりして赤ちゃん産めなくなるところ、腹だから」

「うん、知ってる」

「……川に突き落とすぞ」

今度は悪ふざげとか、そういう雰囲気を持ち合わせていないのを感じると、私は素直に謝った。

ころころと変わる態度についていけないのか、奥村は本日数回目の溜息を吐いた。

その3割が私のせいなんだけどね。自覚してんなら直せよ、っていう。

『あ、そういえば言い忘れていましたが』

「「？」」「」

『貴方が誤った選択を犯した場合、

』

* * * * *

まさか、そうくるとは思っていなかった。でも、普通はそうなるパターンですよ分かりませう。

でも、意外にもショックを受けていた自分がいて、驚いた。

もうこの有り得ない世界に来て、受け入れ態勢万全にしとかなきゃいけないっていうのに、少し受け入れられていない自分がいて、驚いた。

ただ驚いた。

「……ああ、もう帰りたい」

弱々しい声で紡がれたその言葉は、犬の遠吠えによってかき消される。

ただ、かき消されずとも聞く人間は自分しかいないのだから、どう
ってことはないのだが。

元々襲われていた睡魔に身を委ね、重くなつた瞼を静かに閉じる。
明日、起きることに耐える体力と精神力を回復させるために。

(勿論、隣の部屋で寝てる奥村も一緒にだけど)

(ただこれが王道パターンであるなら、その時は……)

柴田の親友

朝食時に柴田さんが具体的にどんな苛めを受けていたのか、奥村から話を聞いた。

簡潔に纏めるならば、うーん。現代人としては、ね。遅れたファッションと同じぐらい面白くない苛めの内容でした。神様から説明されてたとはいえ、ここまで酷いとは思わなかったよ。

『典型的と言えば典型的なんだろうな、と思う。というか、これははっきり言って酷いんじゃないかなんて思っていたりする。顔も何にも知らない柴田さんが受けていたものが、こんな低能なものだと思つと胸が痛むわ！』

「と、いう嘘をついてみたんだけど、どう？ こう、胸にこみ上げつつくるものあった？」

「なにもこみ上げてはこなかったから、とりあえずそのどこから出したか分かんスケッチブックはしまえ」

『……俺の道具に気付くとは、なかなかやるじゃねえか、小僧』

「そんなとある劇画に出てくる超A級スナイパーの主人公みてえな顔すんな。いかついから」

感想も何もなく、ツッコミをいれられ人差し指でおデコをぐいっと後ろの方に押されてしまう。

少し物足りなさを感じるが、もう学校は目前で。朝に「昨日で分かつてるとは思つけど、俺教師だから」と報告された奥村とはそこまですごくしてはおかしいのだ。

「まあ、別に親しくしてなくてもいいんだけどね」

私が呟いた意味が分かってなくて、隣で小さく小首を傾げている奥村。私よりも年上の奴がやるような仕草とは思えんぞ。天然か？天然記念物なのか？ って、ツッコミは置いといて。

聞くところによれば私って結構女子と仲良いみたいなんだよなあ。女子味方って言われたけど、仲良いとは思ってなかったし。仲良くてよかった、柴田さんナイスです！

「もうこんな時間か……じゃあ俺もう行くわ」

「おー、行ってらっしゃい」

小さく手を振るが、振り向かずすたと足を歩めていく奥村はそれに気付かない。

わ、私も私で気付いてほしいなんて思っていないだからねっ！ て、てへぺろっ！

みたいなツンデレいたら自分は容赦なく殴るね。なんでてへぺろまですんデレ文にしたの、と。

奥村がかなり遠くまで行ったのを確認すると私も歩き始める。

ペースはかなり遅め。元々歩くの私早いからさー、追いついちゃうんだよね。

「てっへぺろ、てっへぺろ、てっへぺろりいつ……！」

ごっ、て。ごっ、て鈍い音のお共に後頭部に痛みが来たよ。歌って歩いてただけなのに！

ゲーム機、には限らないけど、そういう重たいものの角で殴られた衝撃が、頭にっ……。

頭が、頭がぐわんぐわんする。立ってられねえ、痛い。

「んだよ、今の……つつ、いつてえな」

きつとここに奥村がいたら口調注意みたいなの受けそうだけど、これ本気で痛い。

サッカーボールとかバスケットボールを思いっきり顔面に当てられても、この痛さは超えられないと思うでござる。超えられないと思うでござる。

「……つつ、あー……やつと直ってきた。ぐらつくけど、歩ける……かな。よし、行くか」

え？ 当てられた物とか紹介しないのって？ いやあ、御免なさい。紹介する前に、当てやがったくだらねえマネしやがる同じ人類とは思えない人に当ててしまいました。

因みに当てたのは男子。制服に私の制服と同じ紋章があったから、同じ学校の人だ。

後ろ向かないまま投げたからどこに当たったかはわからないけど、これだけは確実に言える。

『気絶して倒れている』

と。

「……………」

「あ、ちよつと。通りすがりのおばさんや、そんな変な物見るような目で見えていかないで。」

今のちよつとしたギャグだから、ネタだから。ダッシュで逃げないで、パトラアアッシュッ！！」

50m走やらせたら運動してない文化部にも劣らないぐらいの速さで逃げていくおばあさん。
小またのくせになんだあの速さ。某アニメみたいに砂埃舞ってたぞ、歪みねえな。
猛烈に追いかけたおかげで肩が上下するのが分かるぐらい体中の酸素が足りなくなった私。
額ににじみ出た勲章という名の汗をハンカチで拭っていると、後ろから声をかけられた。

「おはよー、菜々。朝から元気だねえ、ってか髪の毛結ぶのやめたんだ」

「へ……？」

「あのままでも十分可愛かったのに、もったいない」

意表外の言葉に目を丸くする。ちよ、ちよちよちよ、ちよつ、ちよつと待ちなさいよアナター！

この女の子が言った言葉、聞き間違いじゃないよね？ 「菜々」って言ったよね。

菜々、ってあの柴田菜々さんだよ。私と入れ替わっちゃった子。元々苛めにあつた不幸な女の子。私もこの世界に来た時点で不幸ですが。

「菜々1人で何百面相してるの？ 怖いよ？」

「怖くないよ、気持ち悪いだけだよ。そして私は菜々じゃないよ」

「自虐しちゃうんだ。でも、そんな菜々も好き！ ……って、あれ？ 今、菜々じゃないって言った？」

一通り喋りたいことだけ喋って、尋ねてきたねこの子。なんかこういう人、私の周りにいたな！

ってというか、思ったんだけど、これって言っているのかな？ でも、

私を菜々つて呼ぶ時点で、明らかに『異端者』っていうのは確定だし。もしかしたら、今後協力してくれる可能性もあるかもしれないかな。

どうにかなるさー割、どうでもいい9割ぐらいの目線で反応を見つめつつ、私は女の子に告げる。

「えーと、言いづらいんだけど単刀直入に言うね。私は、柴田菜々ちゃんと入れ替わりで来た織原詩歌です。因みに職業は救世主ね」
「……嘘っ!？」

かなりの間を置いた後に、驚いて思わず後ずさる女の子。
いいね、その反応っぷり。久々に新鮮なものを見られて、私は嬉しくて小さく笑った。

けど、私の浮かべた笑みはまた襲いかかってきた頭痛によって歪むことになりました。

「じ、時間差……なう」

「時間差がどうしたの!? それより、出てるよ! 真赤な誓いが額から顎にかけて通過してる!」

ポタポタとこぼれ落ちる“ソレ”は、生暖かくて。ピカピカと浴びせてくる太陽光は、あつたかくて。

ぐるぐる回る世界にふらつきながら、2つのあたたかさに恵まれながら、私ごと織原詩歌は目を閉じた。

(え? 織原が倒れた? ……やっぱり馬鹿だろ)

(呆れてないで奥村先生、何とかしてください!)

傍観者が協力者になった！

今日で7686日目かぁ、と朝、家を出て呟く。何とも長い日数なことだ。

初めの365日はよかったのになぁ。僕が望んだ日常じゃない非常が来たし。

でも、3週目になってから僕の望んでいないことが起き始めた。

1つ目は、僕の親友である柴田菜々が、ループを起こした張本人である日端美乃に苛められ始めたこと。

2週目は、日端美乃が生徒会長と付き合っ、それで終わりだった。平凡なハッピーエンドだった。

でも、3週目は何もかもが違った。僕が一番考えていなかったことが起きた。

見ていて胸糞悪くなった。何もできなくて悔しかった。でも、僕は菜々みたいに何もできないから、ただ見ているだけの傍観者をきどり続けていた。

そうやって繰り返し続けていた何週目かの時、違うことが起こった。数学の先生が何かしらの問題を起こして、学校を辞めてしまったのだ。

そして、その先生の代わりに、『奥村駿』という、日端が好みそうなイケメンの先生が来た。

先生は数学の先生が顧問していた風紀委員会に、顧問として入ることとなった。

僕はこのループし続ける2010年を見て、何個か学べたことがある。

1個目は、日端は生徒会と風紀委員会のイケメンを落とすためにループさせているんだと。

はつきり言って2週目で断言できたつもりはなかったけど、4週目ぐらいでようやく分かった。だって、周りの男子にめっちゃくちゃほやされているのに、立って続けに生徒会とか風紀委員会の奴とくっついてるんだもん。誰だつて分かるよ。

2個目は、日端にかかればどんな男だってイチコロだということ。何をしたかは知らないけど、日端が笑えば男は「この娘ストライク！」って思うし。「愛してる」って囁けば、男はもうダメだ。あれは、もう他の女子に見向きもしないよ、あれ、つてぐらいに、日端にメロメロになる。

見ていて寒気がするほどおかしい狂愛、というか溺愛っぷりにどんな週でも男子に呆れてしまう女子は必ずいた。というか、学校の女子全員がそうだったかもしれない。

3個目は、このループに僕以外気づいていないこと。

3週目ぐらいに1回、友達に話をしたら「今日はもう帰って休んだら？」とあしらわれてしまった。

そこで確信した。僕以外、誰もこのことに気付いていないんだつてことを。

他にも色々気づいたことはある。日端のターゲットは必ず菜々とか、菜々が耐え切れずに自殺することはないとか、まあ色々。

だから、この気付いたことをもう知識として入れてしまっている僕にとつて、今の奥村先生の配置は、確実にあいつの餌食になる配置つてぐらい分かっている。

可哀想になあ、と思えば思うほど、良心がくすぐられるもので。僕は、すぐさま奥村先生に信じてはもらえなさそうだけど話をした。そしたら、先生が

「俺と一緒にやつがいてくれて、嬉しいよ。餌食になんねーように頑張るから、まあ色々とよろしくな」

って、言っただけで頭を撫でてくれた。今までは、生徒会や風紀委員の奴らに言っても、馬鹿にされるだけだったけど。僕の話を受け止めてくれる人は初めてで。そして、日頃の餌食にならなかった人も初めてで。ちよっぴりだけだけど、その時僕は嬉しかった。

その後の週、今回22週中の21日目になる今日の朝。

今までのことを振り返りながら歩いていたら、また違うことが起きた。

ターゲットになっていた菜々が、織原詩歌という女の子に変わったのだ。

1回だけ、菜々がこんな目に遭わなくなればいいようになればいいのに、と思ったことはあるけれど、本当になってしまおうとは思ってなかった。

「一応……想定範囲内、ってことでいいのかな」

困り気味に呟くが、答えてくれる人間は誰一人いない。って、こんなことしてる場合じゃないな。早く手当てしてあげないとね。僕と先生と、先輩と同じ異端者である君を。

* * * * *

走って学校に向かってしていると、学校の目の前にある信号を渡ろうとしている奥村先生を発見。

襲つて……じゃなくて、捕まえて事情を説明すると、奥村先生は心配する代わりに溜息をついた。

しかも彼女に呆れた目線を送りながら。なんだこれ、もしかして2人って知り合い？　じゃなくて！

「呆れてないで奥村先生、何とかしてください！」

「はあ………つたく、俺は保健の先生じゃねーのにな」

そう言つて僕が担いでいた彼女を、えーと………俗に言つお姫様抱っこをした。

恥じらいつていうものをもつてないのかな、この先生は。ほら、青信号待ちの車の運転手さんとか、周りの女の子とか顔赤らめてる赤らめてる！

「せつ、先生………つ。その運びかたはちよつとまずいんじゃないかな？　後々の詩歌のためにも、せめておんぶとか、さ？」

「おんぶとか、走つてたら反り返つてイナバウアーになるじゃねえか」

「いやならないならいい！　そんな態勢にはさすがにならないですつて。ほつ、ほら、先生なら察しましょうよ。それで生徒の間を歩くのはさすがに、詩歌にとつて苦しいと思つんですよ。あつ、ほらうなされてますから。　もうやめたげつ」

とは言つてみたものの。先生の抱え方が変わるわけでもなく。

生徒達から送られる視線が変わるわけでもなく。僕のつく溜息の数が減るわけでもなく。

「先生、ホント心配りできるよつになろうよ」

「何にだよ」

「小五とロリを理解できるようになったら悟れるようになるから頑張るよ」

「一生理解したくないなそれ」

詩歌が眠る右隣のベッドに腰掛ける僕の冗談に付き合いながら、詩歌を手当てする奥村先生の手際は良く。医療師免許でも取ってたのかな、って思うぐらいに対応が的確でただただ凄い。

保健室の先生にでもなったほうがいいんじゃない？なんてことも思うぐらいに。

さっきよりもかなり血行が良くなった詩歌に包帯を巻き終わると、奥村先生は椅子を半回転させて僕の方に体を向けてきた。

「で、何から話す？」

「先生の結婚あ……」

「いねーよ」

「そんなに否定しなくてもいいのに、このい、け、ず、さん」

「ここの学校辞めて普通の一般人としてお前を殴りに行くぞ」

眼鏡を光らせて拳をつくってみせる奥村先生。うん、それ何気に脅しだよな？先生のそれ、確実に脅しに入ってるよね？

なんて心の中で先生にツッコミをいれつつ、へらりと笑いながら今だ眠り姫の彼女に指を指す。

「そんなに言いたいなら聞くけど、その子誰？菜々じゃないよね」

「ああ。どういふ訳かは知らねーが、俺と同じで住んでた世界が入れ替わった人間だよ」

案外きつぱりと言いつつ。もうちょっと焦らすか、何かするかと思つてたのに。意外だなあ。

「じゃあ、奥村先生と同様、奈々の“日端含める男子軍団に苛められて、それを除く女子と奥村先生に守られる”っていうポジションは彼女に引き継がれるわけ？」

「そういうことになるな。ただ家族構成、プロフィールは変わるがな」

「だろうね。奈々と容姿はそっくりだけど、同一人物ってわけじゃないしねえ。これで3人目かあ。うええ、段々面倒くさいことになっていくなあ」

知らない人が聞いたら分かんないだろうな、なんてぼんやり考えている間にも話が進む進む。

僕が繰り返したループの中ではなかったことが、このループにはあるのだろうか。

奥村先生の口からは、どんどんと僕の知らないことが吐き出されていく。

「……と、まあそんな感じでこいつは俺らと違って使命を持ってるんだ」

「それはまあ、なんとも重たいものを担いでおいでで」

どこのRPGじゃないんだから、と一瞬思ったけど、一応この世界だってファンタジーになりつつある。ってか、なってる。そうなってます。神様出現している時点でファンタジー決定だね。

「でも日端つちを止めるって相当難関だと思っただけどなあ。ループ起こしてる張本人なんだよ？ あの子。こっちが事起こしたら何されるか分かったもんじゃない」

「そんな時はそんな時だ。それに、この週で死んだとしても次の週の始めに死んだ奴も生き返るからな」

「えっ？」

生き返る、その言葉に反応して僕は驚きのあまり、素っ頓狂な声を出した。先生は先生でビックリして、僕の方を訝しげに見つめている。

次の週になれば、死んだ人間は生き返る。僕に向けられる視線をよそに、先生の1フレーズが頭の中で繰り返される。

生き返る、ならあの人は？ そうだ、あの時に先輩は言った。「また会える」って。じゃあ、このことって、もしかしてこういうことだったんですか？ もしこのことだとするなら、僕は

「お、おーい？ 紀田？」

「……っ」

「え？」

「僕も、その神様に与えられた使命っていうやつに付き合っよ」

「付き合っって……お前、いくらなんでもそれは危険だ！」

「いいよ、危険だって。それに、協力者はたくさんいたほうが効率UPするでしょ？」

いきなり参加する、と言ってくる僕に険しい顔で押し黙る先生。その顔つきは今までに見たことないぐらい、否、絶対に見られないような暗い表情で。口に手を当て、深く考え込んでいるのか開けられていた蒼の双眼は閉じられている。

その間に進む時間、 分、 秒、 ……。
沈黙が支配した保健室の中で、次に言葉を発したのは数十秒後だった。もちろん、先生の方。

「危険だと思ったらすぐに手を引け。この条件を呑むなら、認めてやらんでもない」

「さっすが先生、話が分かるね！ ……あ、やべ起こしちゃった」

ついつい大きな声で言ってしまったのが災いしたのか、むくりと起き上がる眠り姫。

目をこすって、焦点が合ったのか、詩歌は僕らの方を見た。

「……何で勢ぞろい？」

寝起きのせいか、声が弱々しくしわがれている。いつもの声じゃなかったのが面白かったのか、先生は隠すことなく小さく笑い、そのせいで詩歌に叱られていた。馬鹿だなー、先生。

「って！ 叩くな、頭を！」

「奥村が変なこと言わなきゃよかったんじゃない！ なんなの？ 死ぬの？ オーケー、死ぬのね」

「いやいやいやいや、ちょっと待て。どうしたら死ぬの？ から決定に入っちゃうんだよ。おかしいだろ、そこ！」

ぎゃあぎゃああと騒ぐ2人に置いてけぼりを食らっている僕。なんか悲しいよね、こういう場面って。

ぼっちを味わっているような感じでき。

騒ぐことに十分に満足したのか、ふうと一息つく詩歌。対照に、先生は満足なんて出来るはずも無く、疲れだけがたまっていた。ご愁傷さまです。

「さて、ともう会話に入ってよろしいですか」

「入ればいいんじゃない？ 俺もう疲れた……」

「そっすか。なら 織原詩歌さん」

改めまして、挨拶しようじゃないですか。

「僕は紀田明音。職業はたった今から協力者。せいぜいよろしくしてやってね、救世主さん」

「え、あ、えっ……？」

どう反応すればいいかわからないといった表情で僕の差し伸べた手を握るその手を、僕は「今度は守る」と誓いながら、しっかりと握り返した。

（奥村先生も職業決めようよ、ほらお父さんとか？）

（俺は一端の教師だっつーの）（あ……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2667y/>

Endless Game

2011年11月20日18時34分発行